

時の動き

西日本豪雨大災害に思う

林野労働者
齊藤 充治

天災か、人災か

7月初旬から西日本を中心に襲った豪雨災害は、多くの犠牲者や未だに多くの人々が避難生活を余儀なくされています。気候変動による災害が年々増加してきていることは生活実態の中でも感じていると思います。

私のような林野労働者にとっては本当に悔しい気持ちと悲しい思いで災害状況を見つめています。冒頭、自然災害か、人災か、といいましたが、難しい判断だと思えます。今回の大災害についてははともかくも、これまで起こった山崩れや川の氾濫など森林保護が万全であれば災害を最小限に食い止めるこ



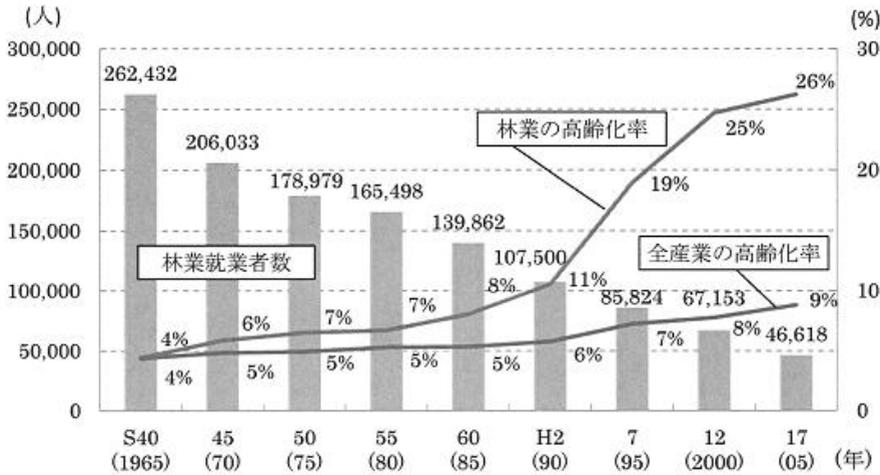
7月豪雨の被災地（広島県）

とが出来たと感じています。しかし、今回の集中豪雨は気象庁の観測史上でも異例の長さで西日本を覆いました。人災でもあり、予期せぬ自然災害でもあると思います。

森林行政の後退

1960（昭和35）年に木材の輸入を自由化して以降、当時86・7%だった日本の木材自給率は「丸太価格の下落」により大幅に低下しました。国有林を管理する林野庁の合理化もすさまじいものでした。併せて私有地の不在地主問題です。国内産の木材価格の下落に「気力」を失う林業者が多く

◆時の動き



林野労働者の状況（林野庁統計）

出ました。この問題も法律の改正で、放置された山林整備は不在地主の同意を得なくとも行えることになりました。それは良いのですが、誰がやるのかは大きな課題になります。

林業就業者の 人手不足は深刻です

林野庁の統計を参照していただけると分りますが、国内産木材の需要の下落に併せ、林業労働者の大幅な削減が伴いました。私の勤務する林野庁も全国的に合理化が進められました。

結局、森林保護や整備問題は自然を守ることになるのですが、労働者があつて可能なことです。自然を守ることは自然災害を少なくとも未然に、

最小限の被害に抑える力になります。

1965年に26万2000人いた林業就業者は、2005年には4万6000人へと急速に減少していることが分ります。

放置すれば自然災害は

「人災」につながります

この7月に発生し、現在もその爪痕を残す「西日本豪雨災害」は、気象条件や山野を含めた自然の保護育成がないとこれで終わりではないということです。昔からいわれてきたことですが、優れた殿様は「治山治水」に力を注いだといえます。治山治水に長けていた人が為政者になった、といわれます。第二次安倍政権になっての自然災害多発を考えると「人災」かなの疑問が生まれます。

(さいとう みつはる)